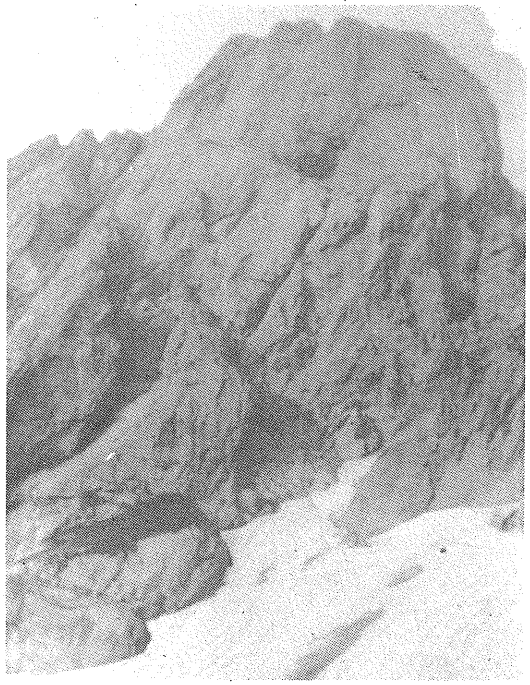
会　報

1983

No. 16



１９８３年８月　剣岳・チンネ

KAC

神戸山岳会

目　　次

会長に就任して …… 片山英一 …… 1

１９８３年度　総会報告 …… 4

夏山合宿 …… 小林利樹 …… 6

〃　（案心登山） …… 幸内義孝 …… 6

行動記録 …… 国沢昭美 …… 7

夏山合宿に参加して …… 広池義則 …… 8

剣尾根上半 …… 国沢昭美 …… １０

個人山行

氷ノ山（すきやき） …… 米沢典之 …… １２

白馬岳主稜～栂池 …… 小林利樹 …… １２

鹿島槍（天狗尾根） …… 掘田　久 …… １３

鹿島槍（初めてだらけの山行） …… 大西章代 …… １５

尾瀬～平ケ岳　スキー登山 …… 幸内義孝 …… １６

白馬乗鞍岳　スキー登山 …… 国沢昭美 …… １７

白山北方主脈縦走 …… 山本泰彦 …… １９

丹波、三岳山々行記 …… 島田文雄 …… ２４

雪彦山～砥峰高原（踏査） …… 国沢昭美 …… ２５

槍ケ岳北鎌尾根（風疹） …… 米沢典之 …… ２７

前穂高岳屏風岩東稜 …… 迫田哲郎 …… ２８

白馬岳～白馬大池～蓮華温泉 …… 国沢昭美 …… ２９

白馬岳　（ちがった充実感） …… 幸内義孝 …… ３０

段ケ峰（がま蛙） …… 米沢典之 …… ３０

お月見コンパ …… 幸内義孝 …… ３１

例会報告 …… ３２

住所変更及び訂正 …… ３３

おめでた …… ３３

編集後記 …… 幸内義孝 …… ３３

会長に就任して

片　山　英　一

昨年９月２３日、剣岳に於ける突然の事故で、前田さんが急逝され、そのあと会員の皆さんの一致した意見によって、会長制度を復活すると言うことになったようです。私は「神戸山岳会」の創立以来の会員だったのですが、うかつな話で会長制がいつなくなったのか、又誰が前の会長であったのか、良く知りませんでした。今年の５月の総会で正式に会長制を復活し、そして私が前田さんのあとを受けて会長に選ばれたのですが、私はもう６６才の老齢ですし、それに本格的な近代登山から離れて久しいので今の山登りの技術や日本の登山界の現況について殆んど知識がありません。又会員の皆さん方とも日常は全く接触を持ちませんで、たまに総会か、新年会や忘年会などで、年に１回位もお目にかかっているかどうか位のことでした。会長に推されて就任し、これから月例の集会に出て、皆さん方の会の運営を見せて頂き乍ら少しづつ会の動き、会員の行動や意向などを頭に入れ、又登山界のことなどをも勉強してゆきたいと念願しています。そして会員の皆さんが例会、集会の円滑な運営や、山行計画の成功に役立つよう、蔭から縁の下の力持ちになって力添えをしてゆき、会員の動きが活溌になり、山行の成果が実り、会員が増加し会の発展につながってゆくよう役立つ存在となりたいと願望しています。

思い返してみますと、もうずうっと昔、５０年以上もの昔話になりますが、昭和５年の春、県立神戸商業学校へ入学し山岳部へ入部して前田さんと初めて顔を合わせ、一緒に山歩きをするようになったのですが、その年の山岳部の５年生の部員であった方々が中心となり、順次進学し卒業していった部員の有志の人達と一緒に昭和９年の秋、ＯＢ．ばかりで社会人の登山団体「嶺同人」を結成致しました。前田さんはその年すでに社会人になっておられましたが、体調を崩して会社を休んでいましたので、この会の創立にはいろいろと、事務の仕事を引き受けていたようでした。私も昭和１０年に卒業して早速この会に入れて頂き、その年の５月に木村寅次郎・久米正彦両先輩に連れられ上高地へ入り、奥穂高の小屋からジャンダルム飛騨尾根などへ、氷雪の山旅を楽しませて頂きました。そのあと次々と新人を迎えてこの山の会は次第に活溌に活動し、目をみはるような盛んな、意欲的な山行を展開して、昭和１５年頃にはもう、神戸を代表する山の会にまで成長してゆきました。そしてこの頃にはメンバーは県立神戸商業のＯＢ．だけではなくなり多くの優秀な山好きの若い人が集まって来ておりました。

日中の戦争は次第に拡大し長期戦化の様相を呈して来て、国民生活はあらゆる面で統制が厳しくなって来ておりました。山へ入るための汽車の切符も手に入り難くなって来ていたので、

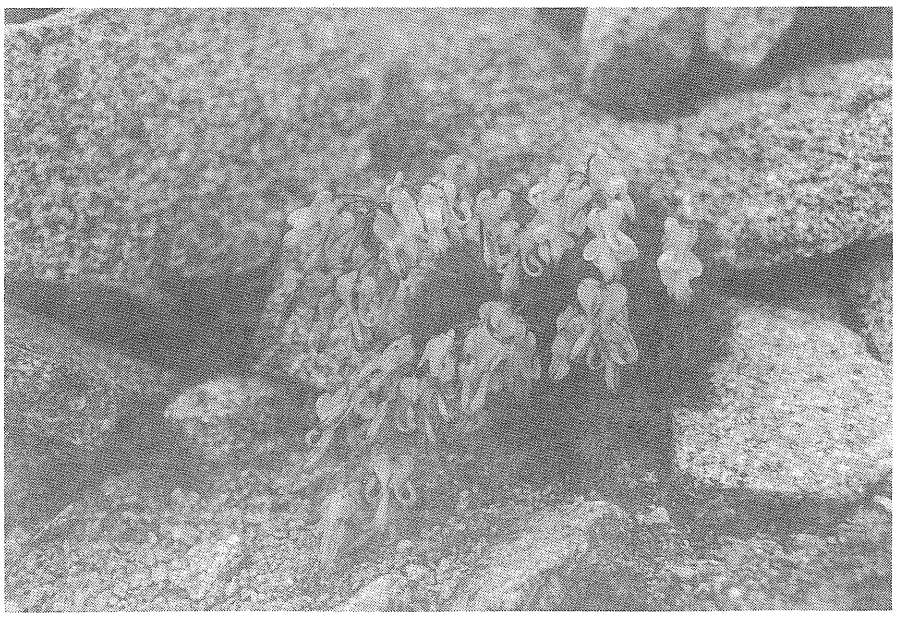
当時の神戸近郊の社会人登山団体を集め統制団体として「神戸山岳会」を結成することになり水野祥太郎博士を会長に、藤木九三氏を顧問として昭和１５年秋、紀元２６００年を記念して発足致しました。然し戦局は更に拡大し遂に大東亜戦争に突入し、会員は各地に散ってしまい山登りも思うにまかせなくなり、やがて郷土は焼土と化し、敗戦へとつき進んでしまいました。神戸山岳会はその間ねむってしまったままでした。

終戦の翌年昭和２１年に私は中国から復員して来て、早速木村寅次郎先輩や前田さんを尋ねて再び神戸山岳会を起こしにかかりました。昭和２４年頃までは私が表面に立って、運営していましたが仕事の場が大阪に移ったため時間がなくなり、それからはすっかり前田さんにゆだねてしまいました。それからあとの神戸山岳会の発展と活躍の歴史は皆さんのご承知の通りです。

何故こんなことをくどくどと申し上げるかと言いますと、嶺同人から始まって神戸山岳会、そして戦後の第二次神戸山岳会を通じて皆んなで相談して正式に会長を選んだのは、水野博士にお願いした創立の時だけで、嶺同人の時も、戦後の復活に当ってからの神戸山岳会でも、会長を選挙した記憶はありません。ただなんとなく中心になって世話をし、代表して登山界のつきあいに顔を出したりしているうちに、いつとなく会長職をつとめて来たような気がします。ですから今ふり返ってみて、全くおかしな話ですが、嶺同人はいったい誰が会長だったのか、さっぱり思い出せませんし、戦後の神戸山岳会も私が復活時代をお世話をしていて中心になっていましたが、そのあと前田さんにお願いし会長職をつとめてもらっていました。従って今度の総会で正式に会長を選んだのは、水野博士を会長に推挙して以来のことではないかと思われます。このように我が神戸山岳会は伝統的に誰を会長にと言うことなしに、動けるものが中心になって世話役をつとめ、動ける会員をまとめて例会を開き山行をつづけて来たのであって、やはり何か事があると責任者として、戦後は前田さんが対外折衝をして来ていたのでしょう。その対外的な責任者としての代表する者があったほうが、山行きがやり易いと言うことで、私が前田さんのあとをつとめるようにと皆さんから指名されたものと受けとっています。然し会則を変更し正式に会長を選出することにした以上、私には会長として会の運営に責任を持つ重要な職責を預けられた上に、更にもう一つ、次の会長を育成し、バトンタッチを行わなければならない後継者の養成と言う大きな仕事を背負うことになったと覚悟をしております。山登りの会の運営と言うものは大へん難しいものです。一歩あやまれば命にかかわる遊びをスポーツとして組織的にそして計画的に、安全に然も参加者全員が楽しく満足出来るように遂行しようとするのですから大へんな仕事です。好きな者だけが集って好きな山へ登ってくれれば良いと言うわけにはゆきません。相互の信頼と友情で助け合い、新しい同好者を受け入れて育成し、より困難な山行をより楽しく、安全に手を取り合って登高し、豊かな心と充実した人生を築こうと言う人達の集いを守り育ててゆく作業なのですから。

返り新参の老齢の会長ではありますが、どうか皆さんのご協力を得ましてこれからの残り少い余生を、私を生み育て上げてくれた神戸山岳会のために捧げたい老の一念をお手助け下さいますよう、ながながと昔話を申し上げ恐縮ですがよろしくお願い申し上げます。

（１９８３．９．１０）



こまくさ

昭和５８年度　ＫＡＣ　総会報告書

日時　昭和５８年5月１５日　１３：３０～１７：００

場所　神戸登山研修所２階

出席者　敬称省略

木村寅次郎、片山英一、島田文雄、新川利夫、岡崎群治、大樫正之、米沢典之、野上芳宏、岸本光弘、田中享三、武田禎、土井健次、谷口忠男、内藤正司、南みち代、古賀英年、宮本朋之、星野辰也、幸内義孝、神田章吉、矢木研三、掘田久、川辺秀司、山内教史、迫田哲郎、吉田典夫、大西章代、広池義則、国沢明美

議事：　(1)委員長、開会の辞

(2)昭和５７年度役員報告

1.活動報告	（内藤正司）
2.リーダ会及び「関西の山々」踏査報告	（星野辰也）
3.企画	（幸内義孝）
4.装備	（吉田典夫）
5.会報	（国沢昭美）
(3)昭和５７年度会計報告	（矢木研三）
会計監査	（新川利夫）
(4)昭和５８年度予算報告	（矢木研三）
(5)故　前田会長、追悼号の報告	（片山英一）

(6)会長制復活の件

1.ＯＢと現役の連絡役として、又現役の相談役として復活させたい。

(7)ＯＢ会費制復活の件

1.ＯＢ会費制、会長及び新役員に一任する。

(8)会則の変更及び追加

1.新役員で決まりしだい報告する。

(9)昭和５８年度　会長及び役員の選出

1.会長	片山英一
2.委員長	岸本光弘
3.副委員長	岡崎群治
4.企画	小林利樹、川辺秀司、迫田哲郎、掘田久、大西章代
5.装備	吉田典夫、広池義則
6.庶務	掘田久、大西章代
7.リーダ会	内藤正司、星野辰也、幸内義孝、小林利樹、川辺秀司
8.会計	矢木研三、南みち代、国沢昭美
9.会報	幸内義孝、神田章吉
10財産管理者	新川利夫
11会計監査	木村寅次郎、島田文雄

(10)会事務所の件

新委員会で決定するまで、内藤正司宅とする。

(11)新会員の入会承認

岡田肇、広池義則、大西章代、紀千賀子

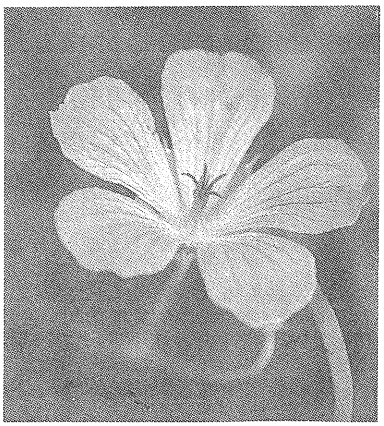
(12)昭和５８年度岳連役員

技術　小林利樹　遭対　迫田哲郎　海外　掘田久　評議　山本泰彦、武田禎

(13)自由討論

(14)新委員長の挨拶

(15)新会長閉会の辞



白山フーロー

夏　山　合　宿　（５８年度）

小　林　利　樹

日程　　８月１３日～１５日

パーティー　小林（Ｌ）　幸内（ＳＬ）　川辺（装備）　広池（食料、気象）

大西（医療）　国沢（会計、記録）　岸本（ＯＢ）

今年は、年間行事予定を組み、５８年度は剣岳で行こうと決定しました。
計画は、中堅会員の技術向上ということで、登攀とした。
当初、真砂沢にＢＣを置く予定でありましたが、岸本氏の参加があり、剣岳西面（池の谷）のことを、我々現役会員より、はるかに詳しいので、入山地を馬場島にアプローチをとる。
池の谷側を、アドバイスしてもらい参加された会員の方々は、自分なりに把握されたことと思う。しかし、ＢＣを三窓にすると、アプローチが大変短縮され、（特にチンネ周辺）本来の姿である登山には、少し合わないのではないだろうか？
自分でも、アプローチは短い方がよいが、この辺のギャップは誰しも感じているだろう。
台風の影響で下山日が、１日短縮になったけれど、充実した山行であった。
今後共、現役及びＯＢの方々も、数多く参加されて、充実した合宿を行っていきましょう。

幸　内　義　孝

今年で７回目の剣岳である。思えば、天候もよく大変楽しい剣岳もあった。又、雨、雨の連続で、一目も剣の壁も何も見えない時もあった、又、事故にあって、何もしなくて、すぐ帰ったこともあったと思いつつ、又しんどい小窓尾根を、登っています。もうちょっとで、雪渓だと、言い聞かせながら？。池の谷に降りてから、三ノ窓に向かって真しぐら、三ノ窓についたらもう、うす暗い。そくさくとテントを張って、疲れた体を横にする。帰りは台風に追立てられ又々、そくさくとテントをかたづけて、池の谷ガリーを登る。室堂に着いた時は、もう歩かなくてもよいと思うと、ホッとする。帰りのバスの中での虹といい、室堂平の虹といい、僕達の後を追っかけて来て、大変美しかった。皆な強くて、何の心配もなかった山行でした。

行　動　記　録

国沢昭美

コースタイム：

8月13日　馬場島（７：１０）池の谷ゴルジュ（９：１５）池の谷（１２：００）
三の窓（１８：３０）

１４日　チンネ左稜線　（小林、川辺）（広池、大西）
剣尾根上半　（岸本、幸内、国沢）

１５日　三の窓（８：３０）池の谷乗越（９：００）長次郎沢、剣沢出合（10：50）
別山乗越（１４：１５）室堂（１６：３０）

8月13日　晴

超満員の急行きたぐにで富山に着く。地鉄の始発（５：４０）まで駅の構内で仮眠する。上市からいつもならタクシーが取水口まで入ってくれるそうだが、今回は馬場島までということであった。心地良い車の揺れに身をまかせて眠っていた私は、岸本さんの説明に上まぶたと下まぶたを離すのに苦労する。フロントガラスごしに黒く高く剣のシルエットが見えている。１日で三の窓まで行けるのかしら？

馬場島で身仕度を整え出発する。最初の１ピッチでもう汗が溢れてくる。取水口まで立派な道が着いているのだから車を入れてくれても良さそうなものなのに…。

白萩川は、とても流れが速そうである。飛び石伝いに行く。私は皆さんに助けて頂いて、やっとの思いであった。池の谷のゴルジュを右に見過ごし、最後の水場で水を詰める。小窓尾根を越え、再び池の谷に出るまで水は無い。尾根道は、樹林帯の急登であった。池の谷に出た所で昼食をとる。テントが２、３張りあった。こゝか、二股辺りで一泊すれば、このルートも随分楽であろう。１日で、三の窓まで行くのがＫＡＣの伝統なのである。

ここから、いよいよ雪渓の登りである。雪渓を登っていると、冷たい風と暖い風が交互に吹いて何とも気持が悪いものである。二股を過ぎた辺りで気分が悪くなる。大西さんに胃薬をもらい飲む。が戻してしまう。共同装備を皆さんに手分けして持ってもらい、後からゆっくり登って行く。何とも情けない気持であった。それでも、少しずつ回復して来たので我ながらほっとする。私の為に、時間が大幅にロスしてしまい申し訳けなく思っています。

雪渓が切れて、ガレ場になってからが一段と長く感じられた。そこに三の窓があるのに、な

かなか辿りつけない。落石に注意しながら不安定なガレ場を行くのは本当に難しいものである。三の窓に向かって右側を登れば道がついていて、随分歩きやすかったようである。

狭い三の窓は、一杯のテントで、雪の上での設営となってしまった。とりあえず作った熱い紅茶が、とても美味しかった。

8月14日　晴

チンネ左稜線　（小林、川辺）（広池、大西）

剣尾根上半　（岸本、幸内、国沢）

8月15日　雨

2つの台風の接近で、夜半から風雨激しく、テントが飛んでしまいそうであった。早く避難しておかないととんだことになりそうである。朝食をすませテントを回収する。立っていると飛ばされそうである。狭い三の窓にひしめき合っていたテントが、全く見あたらない。早々と避難してしまったようである。

池の谷乗越から長次郎沢を下り熊の岩辺りまで来ると、流石に風はおさまり雨だけになる。別山乗越を越えた辺りで雨がおさまり、日がさし始めた。雨あがりの虹がとても美しかった。

夏山合宿に参加して

広池　義則

今度の夏山合宿は剣岳に決定した。僕にとって剣岳は初めてで於以前から行きたかった憧れの山だったし、正月の冬山合宿以来、半年間ゲレンデの練習以外に山行もやっていなかったので、何とか無理をしてでも夏山合宿も参加することにした。

8月13日早朝、富山に着き、少しばかりひと眠りしてから富山電鉄にて上市まで向かう。割と電車内の乗客は少ないし、登山者もまばらにしか、いないようだ。他の数パーティと共に上市で降り、すぐにタクシーにて馬場島へと走る。フロントガラスの正面に剣岳の稜線が見えだして来ると、期待と不安がからんでくるようだ。今日は、なかなかの快晴である。夜行ではあまり眠ってはいないけど、体調はすこぶるいいようだ。馬場島から少しばかり車道を歩いて、白萩川をつめていく。流れを追いながら、大きな巨岩を左へ右へと飛び渡って行く。やがて、小窓屋根の急登にかかると、さすがにこたえる。樹林帯の中なので風はなく、しだいにTシャツも体中、汗でビッショリ。そのうち高度も上がって来ると、涼しい風が吹いてきて気持ちがいい。やっと池ノ谷への下りになると、池ノ谷雪渓からの風が冷たく寒く感じだしたので、今

まで半パンだったのを、長ズボンに着換える。これからがまだまだ長い。あわてず、ゆっくり一歩一歩雪渓に足を進める。雪渓から吹き下ろしてくる冷たい風が時々、生あったかい風になったりして気分がおかしくなるようだ。やがて、池ノ谷左俣分岐点まで登って来ると、さすがにみんなも疲れたようだ。国沢さんが少し気分が悪くなったので、荷物をみんなで軽くしてやる。

ずっと高度も上がると、三ノ窓が青空をバックに、雄大な岩壁をはさんで小さく見えてきた。天気もそう簡単に崩れそうもなく、気分爽快である。テント場を早く確保しておくため、僕一人、先に登ることにした。三ノ窓はもう目の前だというのに、なかなか遠い。雪渓の終了近くで、先行パーティーが、しきりに何か合図をしているのが見える。どうやら、この先の雪渓が崩れ落ちそうなので通るなと言っているようだ。仕方がないので、雪渓右端の岩壁に寄り、ここから岩場を登ってまわりこむしかないと考える。後続のパーティーにも一応教えるべきだと思い、ここで待つことにする。わがパーティーは３０分以上たってから、ようやく登ってきた。他のパーティー１人が、岩場を登らないで雪渓の切れ端をつないで、何とか渡れる方法を見つけたらしく、そこから通ることにした。雪渓をつめると、三ノ窓までは急なガレ場である。最後のこのひと登りが一番こたえた。テント場にやっとの思いで着くと、すでにテントでいっぱいである。仕方なしに雪渓の上に張る。夜になるとさすがに寒くなって、僕はシュラフカバーだけだったので、それはもう、ガチガチ震えながら朝を迎える。

８月１４日、今日も好天である。ゆっくり朝食をとって８時頃出発する。すでに数パーティーがチンネ左稜線の取り付きで順番待ちをしている。３０分ほど待って小林さんと川辺さんらが先に登る。この後、僕と大西さんの番である。僕が先ず、トップで登る。割と簡単な凹角を登ると、バンドに上がりフェースに移る。快適な感じで登れそうだ。又、続いてフェースを登るが、後で小林さんにルートが左側に寄りすぎていることを言われた。ハーケンがどこでも打ってあるので気がつかないまま、直上したようだ。４ピッチ目でトップを大西さんに変わってもらうことにする。ピナクルをまわりこんだ所で再び、交代する。ピナクルの裏を通ってフェースを登ると、急に視界が開けた。平坦なハイマツ混りのリッジの前方で、数パーティーが取付いているのが見えるのだが、小林さんらの姿が見えない。すでに先へ他のパーティーを追い抜いて登っているのだろう。僕らも先へ急ぐことにする。ホールドだらけのフェースからリッジ上の凹角を直上すると、大きなピナクルの連続するナイフエッジに出た。ここからは、コンテで登れそうな感じなのだが、やはり確保しながら進む。前方にはこの左稜線の核心部であるハングが見える。その下部には、かなり多くのパーティーが順番待ちをしている。小林さんらも待ちあきたような感じである。さすがに人気のあるルートだけに、人の多さにはびっくりする。１

時間以上待ったようだ。ふと横を見ると、大西さんは眠ているようだ。よく、こんな所で眠れるなあと感心する。やっと僕らの番である。このピッキではハングまでが油断できないが、いざ、取付いてみると、何とかフリーで行けそうである。しかし、ギャラリーが多いのでやりにくい感じである。下を見ると、さすがに高度感があっておもしろい。意外にホールドもあり、簡単にハングを越し、後は余裕の登攀であった。風が強くなりだしたので少し寒かった。２ピッチほど登ると後は頂上までずっとナイフエッジが続く。頂上には予定よりだいぶ遅く着いたので、小林さん、川辺さんはかなり待ちくたびれたようすである。天気も悪くなってきたようなので休憩もそこそこに、下ることにする。予定では早く頂上に着けば、剣岳本峰まで行くはずだったのが残念である。縦走隊はすでにテント場に帰り終えて、みんな、充実したこの一日だったと思う。夜になると小雨と強風で落ち着かない。どうやら台風が接近しているらしく、明日の天気はよくないらしい。今夜も昨夜と同じくあまり眠っていないようだ。朝になっても強風はおさまらないので、８月１５日、下山と決定する。強風の中、テントの回収に手を焼く。三ノ窓を早々に出発するが、僕らが一番最後らしく、すでに他のパーティーは誰一人といない。池の谷乗越を経て長次郎雪渓を下る。途中、「ラク！」の声があり、振りむけば大きい岩が、こっちの方へ落ちてくる。全員、何とかよけてホッとひと息。あまり、下ばかり見ておれない感じである。足がおかしくなるほど、下ると途中でアイゼンをはずす。後の結果が、尻もちばかりの連続で、なかなか思うように歩くことができず、イライラしてくる。剣沢の合流点に入ると今度は登りばかりである。小雨もなかなかやみそうもないが、別山平まで来ると気分的にホットする感じだ。

途中、御前小屋に寄り、ストーブに当ると、気分も体も落ち着く。３０分程してから、もうひと頑張りだとここを発つ、室堂まで来ると、とたんに疲れが出て来たように足が重くなる。

皆なもかなり疲れたという様子である。台風のお陰で１日短縮になったけれど、仕方がないと思いながらも、ただ本峰を踏んでおけなかったのが残念だった。

しかし、チンネ左稜線だけでも、快適な登攀ができ、天候も二日間恵まれて、まあ充実した合宿だったと思う。

剣　尾　根　上　半

国　沢　昭　美

８月１４日

コースタイム：三の窓（７：３０）Ｒ３取り付き（８：３０）ドームの頭（９：４０）

長次郎の頭（１２：１０）剣岳（１３：００）三の窓（１５：００）

寒くて寝ていられず5時頃起きる。雪の上に寝ることになるとは予想もしていなかった。
今日は、お天気も抜群に良く昨日バテたのが嘘のように気分が良い。

小林さん達4人は、チンネ左稜線登攀へ出発する。私達3人は、昨日登って来たガラ場を左俣支流まで下って行く。剣尾根上半は、この支流を登ってR2に入りコルBより剣尾根の頭までである。岸本さんの提案で、R3から取り付くことになる。剣には数え切れない位来ている岸本さんも登っておられないということであった。

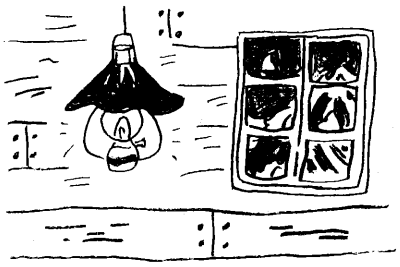
昨日、池の谷から眺めた時はとても急に見えたけれど、取り付きまで来てみるとそれほどでも無さそうなので安心する。始めの3ピッチは、ルンゼの登攀である。岩が堅く、フリクションが効いて快適であった。登攀者は、私達3人だけ。とても静かである。
その後は、コンテで草付きの斜面を行く。踏み跡があるけれども不安定で登りにくかった。
ハイ松帯をトラバースし緩やかなフェースを登るとドームの頭に着いた。

狭いコルBからリッジ沿いにしばらく登り右へ廻り込む。右俣側のフェースを登ってリッジに出、左俣側をトラバースしながら回り込む。ここから階段状のフェースをトラバースする。フェースの左端に15mほどの凹状のチムニーがあり直上する。そこから右俣側を行くと尾根上に出る。尾根道は、主に左俣側を行く。岩稜歩きであるけれど、浮き石に注意が必要である。

コルAから浅いルンゼを登り、再び尾根上に出る。尾根沿いにしばらく登りフェースを左へトラバースして緩い草付きのフェースを登ると剣尾根の頭であった。

長次郎の頭で昼食をとり、私と幸内さんが空身で剣岳往復をする。剣岳は人で溢れていた。大パノラマを満喫して山頂をあとにした。

KACに入会して随分になるというのに、剣へ来たのは今度が始めてである。長い間登りたと思っていた山だったので、念願が叶いとても嬉しく思っています。パーティーの皆さんに、感謝しています。



個人山行

氷ノ山（すきやき）

米沢典之

コースタイム　3月20日　梨ケ原（10：00）　千本杉（16：00）

21日　千本杉（　6：00）　氷ノ山（　6：15）　小代越（11：00）

3月20日　晴　梨ケ原→東尾根→千本杉

T会の若い衆、趣味はディスタンス。氷ノ山未経験のため、彼は重荷、私は案内役と炊事役、千本杉でKACの天幕を尋ねたが不明、それならばとこちらの天幕を開き、じゃんじゃん肉を入れて、すき焼をして見たが、反応なし、この匂いも甲斐なしとは、氷の山が大きいか、又は時代の変化か。

3月21日　雨　氷ノ山→ブン廻し→小代越→梨ケ原

雨の中氷ノ山頂まで、一寸考へて、ブン廻しを歩く、視界狭き行き交う人もなし、片山さんに頼まれてる。そうだ、前田さんは決して、亡くなられたのではない、少なくとも私の心の中では何時迄も生きて居られる。公私共色々お世話になった御恩は、山を歩き続けることでお返し致します。片山さんには悪いけれど、そうさして載きますと、勝手にスキー場に穴をあけ続けました。

白馬岳主稜～栂池

小林利樹

1983年4月12日～14日

パーティ　小林、岡嶋、坂元（アルパイン）

4月12日いつものように大阪を夜行で出発する。今回は以前（79年5月連休）に行った白馬岳主稜である。前回は連休であった為に主稜には、立派なトレースがあったので少々ガックリした。今回は時期も少し早いので、人も少く静かな山行ができるだろうと思いつつ列車の人となる。駅前からタクシーの運ちゃんに、入れる所まで入ってくれと交渉する。

3月であれば二股位までしか入らないけれども、今は、大分除雪も進んでいるだろうと云う。

約1km位猿倉山荘手前まで、除雪が進んでいたので大分もうけものだった。
ここから上部は、除雪がまだなので雪が急に増してくる。
道路脇で朝食をとり、スパッツをつけて歩きだす。いつものことだけれども、夜行の睡眠不足で足が、意に反して思うように前へ出てくれない。今日は天気も良く最高である。
白馬尻付近は、雪崩の名残りのデブリが出ている。これからはブロックの季節だなあ!
この辺までくると、雪も腐ってくるので膝ぐらいまで潜ってしまうので疲れる。末端Pまでが、大変遠く感じてくる。しかしトレースがない雪の斜面を、自分達で足跡を印すのは大変うれしいことだ。
P6付近に雪割れがあったので、ここをトラバースするのに気を使う。落ちれば白馬沢まで一直線である。日も大分西に傾いて来たので、雪面もクラストしてきてアイゼンが、小気味よくきいてくる。P2直下の所で今宵の寝床の為、雪を削り取り半雪洞を堀り、ツエルトをかぶる。
明日も天気がもちますように。満天の星が夜空に輝いている。

4月14日

今日も天気はよさそうである。風が強いけれども、
最後の雪壁を見上げると、胸が高鳴ってくる。2ピッチで頂上に出る。稜線に出ると黒部側からの強風が顔を刺す。剣岳が目前にあり感激であった。3人で握手をし写真を、パチリ!
あとは稜線を、乗鞍岳へと歩むが、風が大変強く足をすくわれそうだ。
天狗原にはスキーヤーが上がってきている。ここからは歩くのが大変わずらわしい。あのスキー板を、貸して欲しいな!
スキー場から新しく設置されたゴンドラで下まで降りる。12時着でした。
栂池もシーズンが終ると人々も、まばらになりスキー場も閑散としている。

鹿島槍（天狗尾根）

堀田　久

5月

メンバー　迫田、小林、大西、堀田

車中、まったく寝れないまま大町に着く、タクシーで大谷原へと向かう途中、小林さんは、熱心に見える山々の説明をしてる。僕は、うつろな頭で、桜と梅の同時に咲いてたり、恐ろしく古い麦わらの家々、それらの家の木々の花の色は、なんて麦わらの色とよく似合っているようだ、唐松林って、本当に涼しそうだなとか、そんな風景を眺めてたようだ。

大谷原から川原を足をならすように1時間程歩き、出合からすこし進んだところより、渡渉。

冷たく足が切れそうだった。ここより、やや強引にブッシュのなかを斜上し、急な尾根に出る。黙々と雑木そしてブナ林へと登れど雪はなし、この尾根の難所である、2つのクーロアールもガレでしかなかった。第二クーロアールより上は、雪とヤセ尾根の道となる。その上の急坂を登ると、突然視界は開け、鹿島本峰は目前に立ちはだかり、爺ケ岳は、美しいヒダを縦に幾筋ものばしていた。山を登ってて、いつも最高の気分に成る場所である。天狗の鼻って広いな！ここで、テントを張ってくつろぎたいが、今回は雪洞をつくるのも目的のため、小雪のちらつくなか、シャベルをふるう。いざ、完成してみると、広く、明るく、けっこう暖く、なにせ新鮮でいい。さっそく、ウイスキーを飲み、うまい夕食を食い。よく歌ったし笑った。最近あまり笑わなかったのに、本当に楽しかった。

昨夜、入口に寝てると強い風と、冷たい壁に悩まされ、またしても眠れなかった。朝方、吹雪いてたのでしばらく雪洞にこもり、天気が良くなってから、ここからアイゼンで雪と岩の尾根を登る。僕はなぜか、人さし指でも上げれる程の荷物で女性の大西さんは、一番重い荷を背負っている。大まかな岩場などで、つい1人で登ってしまう。下で彼女にザイルを付けてる小林さんを見ると、思いやりの無さを感じる。舎屋岩の左を巻き、荒沢の頭のあたりで、ゆっくり、風景を楽しむ。東尾根は、ヨーロッパアルプスのようだ。遮るもののない空間に、吸い込まれそうだ。本当の色で見たく、サングラス取ったり、付けたりする。この上の南峰まではトラバースがつづき、緊張して渡りきると、そこは、南峰でした。剣岳が美しい姿を見せている。ここで一服し、北峰で行動食などを食べ、アイゼンをはずし、冷小屋へと急ぐ。

ここでは、天井はレスキューシードとツエルトをかぶせた、簡単な、雪洞を掘る。

この夜も、酒を飲み楽しく過ごした。久々に本当によく笑った。腹が苦しい程、笑った。特に小林さんの淡々とした表情で、おかしな話をするのには顔負けしました。

迫田さんもルンルン気分に、大西さんも、ぜんざいのあずきを鼻に詰まらせる程笑ってた。翌朝、赤岩尾根をグリセードをしたりしながら下った。急な斜面を無理に下り、手をちょっと切った。僕は、馬鹿なので〝岳人の歌〟のイメージを印象づけたくてやったのかもしれません？雪洞などの、色々な技術を教えていただきありがとうございました。そして何よりも青空のもとで、行動できラッキーでした。

鹿島槍　天狗尾根（初めてだらけの山行）

大　西　章　代

今回の山行は、私にとって初めてのことがたくさんあった。

まず、社会人になって初めてだということ。4月からやっと1ケ月、まだ生活のリズムがつかめず、幾分緊張気味の毎日を送っていたので、ついていけるだろうか、という不安が大きかった。だから、何とか予定通りに行くことができ良かった。

例年に比べて雪が少ないとかで、小林さんや迫田さんは、特にクーロワールなど期待外れだと言っておられたが、雪がなくても危なっかしい私にしてみれば、ほっとしたというのが本音のような気もする。でも雪がついたらどうなるか見てみたい気もしたが……。

しかし、逆に雪の少ないせいで、予定になかった荒沢の渡渉を強いられ、どうなるかと思った。雪解け水の冷たさも初めてのひとつだった。あと少しのところで、ひっくり返りそうになり、よく渡れたなと思う。もし、あそこではまっていたら、全身ずぶぬれでこごえていたのだと思うとぞっとする。

そして最も楽しみにしていたのは、雪洞で寝られるということだった。

初日は天狗の鼻でビバーク。張り出した雪庇のところへ、ザイルをつけておりて行き、斜面側から穴を堀って、ノコギリで雪のブロックを切り出し、最後に斜面側にブロックを積み、入り口は横から階段を作り、完全に部屋ができ上がっていた。私はほとんど上でうろうろしていただけだが、どんなのができるのだろうか、とワクワクしていた。中に入ってみると、広くて明るく、そして暖かだった。風が吹いても、雨が降っても全然わからないのにも驚いた。これだけ立派な雪洞はなかなかないだろう。と皆んな満足気だった。

翌朝、出発の時、テントのようにたたんだりしなくてよいというのが、また気に入ってしまった。

その日は頂上目覚して急登。目の前の踏み跡をひたすら追いかけていたけれど、どんな大きな人が歩いたのだろうと思うほど一歩が高く、しんどかった。昼頃から天気も良くなり、北峰南峰とも風は強かったが剣の方も見えて気持ち良かった。その後、冷池まで下り、2度めのビバーク。今度は天井がないのでツエルトなどで覆いをしたのだが、幸い晴天で、すき間から星が見えたりしてそれはそれでいいものだった。

天気はだんだん良くなりそうで腹が立ったが、最終日は下るだけだった。ところが、この下りが私にとっては予想外に大変で、急なところでスリップしてしまい、うまい具合に小林さんに止めてもらえたが、止まらなかったらどうしょう、と思ってしまった。一度こわくなると、

なかなか直らず、長い長い下りになってしまった。こんなことなら登りの方がよっぽど気分的に楽だと思った。

大谷原まで戻ってくると、上とは季節が違っていて、雪洞やスリップが夢の中のことのように思えた。いつものことながら「ああ、帰りたくない」。

尾瀬スキー登山　（平ケ岳）

メンバー　幸内、（大西）

幸　内　義　孝

5月1日　鳩待峠（11：15）→至仏岳（14：00）→日崎乗越（16：50）→泊

5月2日　日崎乗越（5：25）→平ケ岳（11：10）→藤原岳（14：30）→平ケ岳（18：30）→泊

5月3日　平ケ岳（6：25）→分岐（8：50）→大白沢岳（9：45）→影鶴山（10：45）
カッパ山（12：15）→大白沢岳（12：50）→分岐（13：20）→ススケ峰（14：05）
日崎乗越（16：30）

5月4日　日崎乗越（5：55）→ムジナ沢（8：00）スキーで杉林迄→至仏頂上（10：30）→
至仏山荘（11：40）→見晴十字（13：45）→尾瀬沼（15：50）→東電小屋（17：15）
→三平峠（17：50）→最初の林道（17：50）→泊

5月5日　林道（5：30）→大清水（7：00）

鳩待峠に着いた時は、雨の降りそうな、変な天候であった。峠でソバを食べて、出発である。ナウギャルがいっぱいである、みなさんの装備見てると淋しくなるのです。回りのギャルたちゴアテックスなんだ、しょぼん！　ガスの中を至仏岳に向かって、どんどん高度を上げる。しんどい登りだ。頂上に着いても、ガスの中なので、とてもスキーでは下れそうもない。岩稜に沿って下る。途中スキーを持っての、ハイマツこぎ、うんざり。そしてコルの日崎乗越へと着く。5月2日、ガスの中をどんどん北へ、北へ、登ったり降りたり、何回行なったろう。途中に数パーティーが、テントを張っていた。13時頃から空が晴れてくる。あれ！前方には高い山がないのです。平ケ岳は、どこへ行ったのだろう。道に迷ったのではと一時不案になる。後を振り帰ると、何と遠くに平ケ岳があるではないか。僕達は利根川の源流、藤原岳にいるではないか。今日は平ケ岳迄なので、又バックすること3時間、あーしんど。

5月3日、快晴、昨日ガスで天候がよくなかったため、スキーを持って来なかったので、平ケ岳からの下り、がっかりしながら、歩いて日崎乗越へ。

5月4日、快晴、日崎乗越から至仏への登り。又々スキーをかついでの、ハイマツこぎ。ある

くと！、でも、いい天気でムジナ沢を快適にスキーで、すべる。至仏山荘手前迄行き、スキーだけかついで、至仏頂上へ登る。　スキーで下山、何と気持ちよいことか。至仏山荘へ。後は下を向いてただひたすら、東へ東へと行く、尾瀬ケ原をこえ、尾瀬沼をこえ、大清水手前迄、バカみたいに歩く、5月5日、朝1番のバスに間に合うよう。大清水へ下る。

白馬乗鞍岳スキーツアー

国　沢　昭　美

昭和58年5月1日～3日

パーティー：野上芳宏、博司、哲男、乾、数野、土居、吉田、牧園、国沢

5月1日（晴）

白馬大池駅に着くと、乾、数野、土居の3氏が私達を迎えて下さった。東京から車で来られたそうである。関西に比べると交通の便は格段によいようである。

親ノ原からテレキアビンに乗る。少々高くつくけれども乗り心地は大変よい。風は当らないし白銀の後立山連峰を眺めている内に、私達も一気に雪の世界へ到着してしまった。

身仕度を整えて、一路天狗原へと登って行きます。連休なので人が随分多い。ヘリコプターが爆音を轟かせてスキーヤーを乗鞍山頂へ何度も運んでいる。日本には、ブルジョアが沢山いるのですね。成城大フュッテ横で一休み。4年前の冬合宿でBCを張った所である。初めての雪山でまごつくことばかりだったけれど、とても楽しかった。

天狗原へ割合早く着いたので、乗鞍岳まで登ることになる。30分余りで到着。山頂でスキーを着け、いよいよ蓮華温泉へ向って滑るのみである。乗鞍岳の大斜面を、クリスチァニアで豪快に滑って行く後を、私だけが斜滑降、キックターンは大変みじめでした。天狗原から温泉へは、標識もあって楽しく滑れました。

5月2日（雨のち晴）

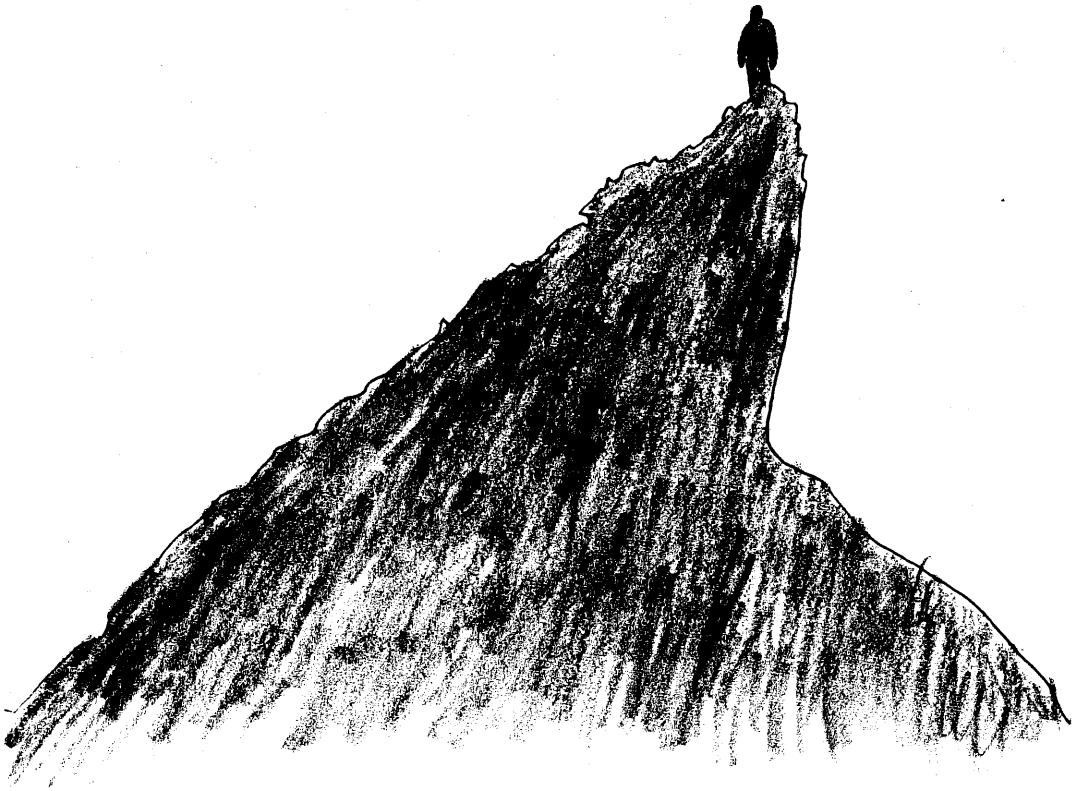
前夜からの雨が朝も続いている。天候が快復しても、今日予定の雪倉岳往復は時間的に無理のようである。10時頃、雨がおさまってきたので天狗の庭に向って登り始める。天狗の庭の手前辺りで、青空がちょこっと見え、あっという間に快晴。雪倉から朝日の緩やかな稜線がまぶしい。折角、天気が良くなったのだから乗鞍岳まで登ってみることになる。ほいほい皆さんに着いて来たのはよいけれど、ふと振り返るとすごい斜度！　上級者のツアーコースである。皆さんは、滑りたがっている気配。一度こけたらどこまでも落ちて行きそうです。野上さんが乗鞍岳から昨日のコースを下ろうと決めて下さって一安心。

雷鳥のつがいがのんびり日なたぼっこをしています。大池は雪原になっていて、半分位埋れた小屋の側はテント場になっていました。ちょうど盆地のようになっているので、月当りも少く快適そうです。時間が止ったみたいにのんびりしているのですが、午後も大分過ぎていましたので雪面がクラストして滑りにくく、乗鞍の斜面では斜滑降の距離が一段と長くなりました。

5月3日（晴）

今年は雪が少く、蓮華温泉から木地村までスキーをつけたり、はずしたり大変忙しかった。2年前の時は、木地村のずっと下まで滑れたそうである。

麓まで下って来ると新緑が初々しく、水芭蕉が何気なく道ぶちの湿地に咲いていたりして、自然の美しさに感激してしまいました。楽しかった2日間は、瞬く間に終ってしまいましたが、温泉につかってスキーツアーが出来るなんて最高でした。



白山北方主脈縦走

山本泰彦

１９８３年5月４日～８日　　パーティ：山本（単独）

もう５、６年前になろうか。里の紅葉が散り始める晩秋の頃、越中・五箇山の岳友・山崎氏の案内で、猿ケ山を訪れたことがある。秋の青空に映えて、新雪を粧った白山主峰を、大笠山・笈ケ岳のはるかかなたに仰ぎみた時、これら県境の山々を縦走して、あのピークにたちたいものだという登高欲が、沸々と湧き出てくるのを感じた。

５月４日（快晴）　大阪（前夜）――高岡――西赤尾（９：１５）――５８５ｍ付近（９：３０）
ブナオ峠（１１：１０～４０）――赤摩木古山（１３：５０）――見越山（１５：４０）
奈良岳（１６：２０）――Ｂ.Ｐ.（１６：３０）

五箇山の最奥の部落、西赤尾からブナオ峠へ約２kmはいった所で、土砂崩れのため通行不能になり、ここでタクシーを降りる。崩れる足許をだましだましトラバースして、通過。道端にはフキノトウが顔をだしている。谷には所々雪が残っているものの、冬山装備の体にはとにかく暑い。ブナオ峠に着く頃には、少し脱水状態になる。ブナオ峠は５年前と全く変らず、静かに雪に埋れている。前回はここから北の猿ケ山へ向ったが、今度は南へ白山を目指して、縦走を開始する。大門山への稜線は所々雪が融けて登山道がでている。展望が開けると、どっかり腰をおろして雪をほおばり、大休止をとる。東に庄川を隔てて、ゆったりした山容の人形山。南にはこれから向う大笠山が美しい。何回も休み、そのたびに雪をたべている。天気の良すぎるのも考えものだ。ぶらぶら歩いているうちに大門山との分岐まで来た。目前に標高で５０ｍも登れば頂上であるが、どうも往復する気がしない。『相当バテているのだな』と自己分析する。赤摩木古山との鞍部付近には、残雪が巾２０ｍぐらいで続いており、冬の積雪量が偲ばれる。やせた雪の稜線をやっとの思いで登ると赤摩木古山の頂上である。真新しい標柱やベンチが設けてある。金沢から来たというパーティが見越山の方から登ってくる。高三郎山から登山道伝いに登ってきたそうだ。これが白山までの５日間に出会った唯一の人間であった。

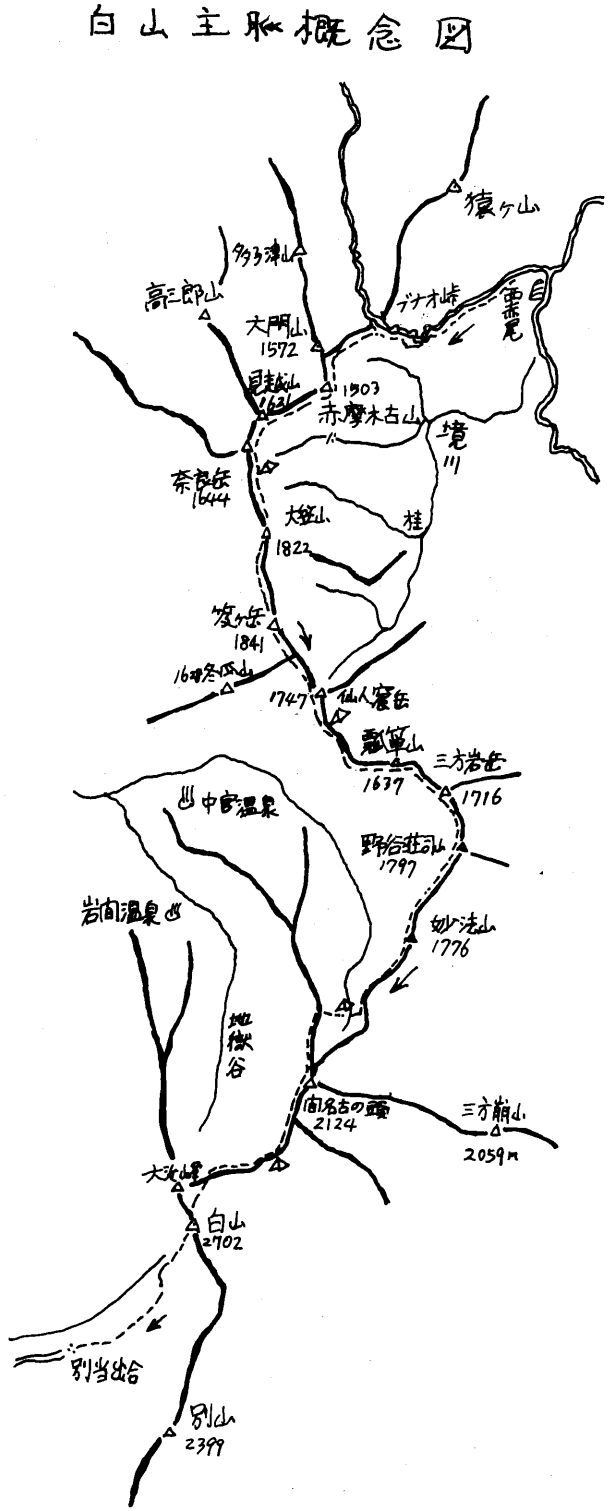
これから向う見越山は双耳峰で登高欲をそそる。だがその鞍部は相当切れこんでおり、やせた尾根が続いている。急な雪面を一歩一歩慎重に下る。２つ３つコブを越すと見越山の急な登りになる。キックステップで登るが、しまいには指先が痛くなる。雪が消えて登山道があらわれるとすぐ頂上である。登山道は、先ほど出会った登山者が通ってきたという高三郎山へのびており、県境尾根は低いブッシュとなる。向いの奈良岳は白いピークだ。コルまで下れば、ブッ

シュから開放される。奈良岳への登りは、風のせいだろうか、大きな白い階段になっている。頂上は東西に長く、地元の河内山岳会の標識がポツンと雪の上にたっている。南に大笠山が尾根を屈曲させて堂々とした山容をみせている。西には負けず劣らずの山容をした奥三方山が控えている。いずれも標高２０００mを切る山とは思えないほど立派な山々である。県境尾根を忠実に下り、二重山稜になった窪地でビバークにする。

５月５日（快晴）　B.P.（７：００）
—大笠山（９：３０）— 宝剣岳（１０：４０）— 笈ケ岳（１２：５５）
仙人窟岳（１５：００）— BP（１６：１０）

昨晩、テント近くのブッシュでガソゴソ音がする。どうも熊がいるようだ。スキーのストック１本しかないので、武器としては心もとない。ないよりかましとこれを側において寝る。いつのまにか、ぐっすり寝てしまって、太陽がだいぶんあがってから、あわててとび起きる。思った通り、雪に埋めていたペミカンは堀り返されていた。とにかく出発だ。

斜面でグリセードしたまではよかったが、制動をかけたとたん、



「ガキッ」という音と共に折れてしまった。ピッケルを持参しなかったのでさあ大変。

稜線の西半分はブッシュ。東斜面に残雪が、崩壊寸前のブロックとなって張り付いている。幹曲りのブッシュを避けて、ブロックの雪壁を攀る。手で雪を掘って、ハンドホールドを作り、アイゼンをけりこむ。ブロックを越し、平坦な尾根の雪原にでるとほっとする。ピッケルを持ってこなかったことを後悔する。左手下方の仙人岩は、高距２００m、巾４００mのすっきりした岩場である。あとは尾根伝いにブラブラ歩けば、いつのまにか、大笠山頂上である。雪に亀裂がはいっているのも気にならないような広い広い頂上である。一等三角点は細長い頂上の南端近くにあり、そこだけ円状に笹が刈られていた。ここからの展望は、宝剣岳、錫杖岳を前衛に持つ笈ケ岳が圧巻である。鞍部まで３００mも下り、同じだけ登り返さなければと思うと気が重い。それに笈ケ岳がブッシュで黒々しているのが気がかりである。鞍部まで一気に下る。この下りは先行者のものと思われるトレールがあった。鞍部から宝剣岳（１７４１m）までは細々と雪の回廊をたどることができた。しかし、そこから先はブッシュだ。雪国特有の幹曲りの木のヤブコギをさせられるとは思いもよらなかった。１００m進むのに３０分以上もかかる。それにこの無風快晴というオマケ付きだ。雪のテラスにでてほっとする。雪をほおばり、大休止。大笠山を眺めながら昼食をゆっくりとって人心地となる。雪壁を攀ると、錫杖岳。そこから歩き易い笹のとなる。笈ケ岳頂上には、ホーロービキの缶の中にノートがあり、記帳する。五月のゴールデン・ウィーク、北アルプス等の著名山岳では下界と変らぬ混雑ぶりだろう。深田久弥氏の愛した笈ケ岳も今年訪れた人はノートによれば１５人程度だ。

僕の視界には、人一人映らない。自然の温い静寂の懐に抱かれて僕はとても幸福だ。

笈ケ岳から仙人窟岳への鞍部にはトレールがある。冬瓜山方面から、あるいは三方岩岳から、往復する人がいるのだろう。大笠山のピークを踏まずに眺めるだけというのは勿体ない話だ。鞍部直前、１０m程度の岩場で稜線はきられている。石川県側に少し下り、バンド伝いにまくことができた。崩壊寸前の雪壁を登ると、広々とした仙人窟岳の一角にとびだす。向いの瓢箪山は白一色だ。しめしめこれでヤブコギから解放された。と喜んでいたら、雪がきれて、ヤブとなる。雑木林で密生しているものの下りなので割合楽だ。１６４６m独標から少し下った所の雪のテラスを今宵のねぐらにする。

５月６日（曇のち雨）　Ｂ.Ｐ.（５：００）―フクベ山（６：３０）―三方岩岳（７：５０）―野谷荘司山（９：５０）―昼食（11：20～12：00）―妙法山（12：30）オモ谷出合（１４：１０）

昨日までの快晴が嘘のように空はどんよりしている。雑木の生えたうるさいコブを越すと、白一色の国見山への登りになる。雪の上は気持が良い。フクベ山への尾根はブラブラ歩くには

もってこいだ。白山主峯はまだまだはるか遠くにある。２つ目のコブで直角に雑木の中を下ると左下に白山スーパー林道がみえる地点に降り着く。三方岩山へは割合ゆったりして歩き易い。途中で雪の下から登山道が現われる。もうヤブコギしなくても済むと思うと一安心だ。加賀岩からは一昨日から歩いてきた山々が、ほとんど望見できる。猿ケ山もどっしりしていて、なかなか良い山だ。

朝から心配していた雨が、パラパラという音と共についに落ちてきた。飛騨岩、馬狩荘司山付近から、下の街道、それに大牧ダムがよくみえる。庄川を隔てて、猿ケ馬場山が指呼の間にある。野谷荘司山から次のピークを越すと、広々とした雪原にでる。ここはもうせん平という所だ。池塘も今は雪の下、夏までゆっくりお休み下さい。妙法山の急登を目前にして昼食を摂っていると風雨が強まった。妙法山の登りは、風雨が強く、足だけでたっていると飛ばされそうになり、消耗が激しい。最後の雪壁もなんとか登ると頂上。風が強く早々に退散する。なにしろ岐阜県側からの風が強く。全身ズブ濡れとなる。オモ谷を渡った所で辛抱できずビバーク。

５月７日（雨のち曇）　B.P.（11：30）── 2010ｍピーク（13：00）── 間名古の頭（14：25）── 北弥陀ケ原（16：50）

一晩中、風雨すさまじく、ゴアーテックスのシュラフカバーをしているのに、シュラフはズブ濡れ。体全体が濡れ、歯がガチガチ鳴っている。ウール主体の冬山装備だから、なんとか持っているようなものの、綿でも着ていた分には、凍死しているだろう。テントの所だけ、周囲より２０cm近く高くなっている。よく雨が降ったものだ。用事があってテントから離れるとテントが風にとばされてころがっていく。「オイ、待て、テント！、僕をおいてどこへ行く。」

雨が小降りになり、時々、薄陽がさしてきたので出発する。明後日には出勤せねばならぬ。２０１０ｍピークへ、高度差４００ｍの登り。最初は少しきつくジグザグに登る。雪がアイゼンにダンゴ状に付いて、ピッケルがないため、それを外すのに苦労する。でも広い尾根状となり、傾斜もゆるくなると、ほっと一安心。２０１０ｍピークにつく頃には、雨もあがり、少し展望がきくようになる。三俣峠までは５０ｍほど雪壁状の所を登り、あとはだらだらした下り。県境尾根と合すると、奥三方岳が、目前にせまってくる。立派な山である。岐阜県側の谷は崩壊がすさまじく、雪がとけている所もある。間名古の頭は雪の白い頂上である。ところが、その下りは雪が完全に融け、ハイマツこぎをさせられる。縦走路はこの頂上をまいているため、踏跡すらない。思わぬことにぐったり疲れる。鞍部に着くと大休止。鞍部からは登山道がでていてほっとしたのもつかの間だけ。階段状になると、すぐ雪の下に隠れてしまい、雪壁に化ける。尾根とはいえ、両側ともすっぱり切れているだけに、またまた緊張させられる。でもこれを過ぎると、稜線は、ウグイス平と呼ばれる広い雪原をポクポク歩くことになる。右手の富山

県側は地獄谷と呼ばれるそうだが、雪がべっとり付いて迫力なし。天候が回復したのか、奥三方山方面に積乱雲があらわれている。夕立でもくるのかなあ？、北弥陀ケ原と呼ばれる2349m独標の一角の広々とした雪原を今宵の泊地とする。今朝のこともあるので、テントはハイマツの幹にしっかり結びつける。濡れたシュラフを残照に乾し、寝心地を少しでも良くする。

夜8時頃、バラバラとテントをたたく音がするので、顔をだすと、それはアラレだった。積乱雲とアラレ。嫌な予感がする。風も強くなり、テントの張り綱と争っている。遠くでドカンという音。底雪崩でも発生したのかなあと思っていたら、稲妻が光っている。最初は稲妻と雷鳴との時間が離れていたので安心していたら、だんだん接近してくるではないか。5秒、3秒、このあたりには、雷の標的となるような大きな木はない。シュラフカバーをかぶって、瞼を閉じていても稲妻は、ハッキリ判る。僕も雷に襲われるのか!! ここは尾根上の広い雪原だし、黒コゲになっても遺体の発見は容易だろう。ヘリコプターでも飛べばすぐにみっかるだろう。「ピカッ」「ドーン」瞬間だった! あっ、やられた!! その一瞬、「文彦、由加子（息子と娘の名前）、すまない。」と思う。しかし、生きていた。落雷地点は100mと離れていないだろう。全く命拾いをしたというものだ。雷はまだ近くでなっていたが、だんだん遠くなっていった。音がきこえなくなったので時計をみると12時近くだった。

5月8日（雪のち曇） B.P.（8：15）── 2349mピーク（9：20）── ヒルバオ雪渓上部・翠ケ池畔（11：00）── 白山御前峰（12：00）── 別当出合（14：15）── 金沢

晩夜、緊張したせいか、朝は寝すごしてしまった。雪も小降りになったので出発にする。風でとばされてしまったのか、積雪はさほどない。それよりも気温が下ったので氷化しているため歩き易い。2349mから100mほど下り、稜線と別れヒルバオ雪渓にはいる。霧の中で視界300m。雪渓のつめの200mは完全に氷になっている。雪渓にはいる前に拾った木がバランスをとるのに役立つ。ここでスリップでもしようものなら、確実に昇天するだろう。

翠ケ池畔はすさまじい風だ。スリ足で進むが三歩に一回はすくわれそうになる。大汝峰と御前峰のコルを通過するため、加速されるせいだろうか。岩陰を縫いながら、御前峰に裏から取付く。上部は氷化。アイゼンの前爪をきかして攀じる。頂上の一角にでるが、依然風強し。

ブナオ峠からの長い縦走だった。すぐ下の奥宮に人がいる。室堂からの登山者だ。5日ぶりの人間である。室堂側は風が弱い。スキーヤーが登ってくるが、頂上の風の強さに驚いて、スキーを担いだまゝ下っている。黒ボコ岩付近で、自転車を押しあげている人に出会う。頂上から自転車で下るそうだ。5月の白山ではスキーは時代遅れになるのも時間の問題だろう。

日本アルプスの北端の著名な三つの山岳、白山、劔岳、白馬岳から北の日本海に伸びるそれぞれ稜線には、以前からロマンを感じていた。今回そのひとつを踏破したのである。5日間、人に会わず、トレールもほとんどなく自分だけの山にどっぷりつかれたことを喜びたい。

丹波三岳山々行記

島田文雄

１９８３年5月２９日

メンバー　島田、　新川、　野上（博）、　武政

大阪（８：００）→上川口（１０：２５）→山の家（１０：４０）→三岳神社（１１：４０）

三岳頂上（１２：１０）→山の家（１４：００）→川西（１７：３０）

休日のこととて、日頃の喧騒とはうって変った大阪梅田を八時頃、新川君の知人の武政君の車で出発、池田で野上（博）君を捨い、国道１７３号～９号線を走る。

福知山を過ぎ、上川口で９号線より田舎へ入る。間もなく三岳青少年の家に到着。直ぐ上手に金光寺という寺があって、大化元年頃、役行者の開基とかで、この地方の山岳信仰の中心であったとのことだ。茅葺の山門が珍らしく早速写真をとる。

三岳神社への参道を登り始める、右側に金光寺歴代住職の墓が並んでいて、この寺の古さを示している。だらだらと登り道が続く、雑木林や、杉、桧林の中を、森林浴をしながら歩を進める。やがて三岳神社に到着、神社は屋根も周囲もカラー鉄板で修理されていて、神々しさも風情もない、しかし雪の深いこの地方では、雪害から社を守るためにはやむお得ないだろう。

社の裏手より頂上に向かう、鉄砲登りの急坂を、一息入れながら登る、やはり年令には争えぬ。

頂上には、マイクロウェーブの鉄塔が建っていて、一寸がっかりした。山頂は周囲の木が大きくなっていて、四方の展望はきかない。北に大江山が木の間越しに僅かに見える。西方は、見透しがよく、遠くには永ノ山、鉢伏山と思われる山並が、又妙見山、蘇武岳の山々も見えて、その昔、若かかりし頃にスキーで走り廻った事などが、思い出されて、一入懐かしく、当時の楽しかった事を頭に浮かべながら書食をすませる。

同じ道を山菜（ワラビ、フキ等）を採りながらゆっくりと下山、再び車中の人となって、帰途につく、福知山の長安寺や、市島町の石像寺へ参詣する。何れも立派な石庭であった。

拝観料は無料で、京都のガメツイ寺に比べ、何となく奥床かしく、お賽銭も想応に納めさせて貰らった。家で待って居られる奥様方の土産に、車を止め、丹波名産の「さる酒」「栗酒」を買っている一行の後姿はほほえましかった。

最後に、往復共、車を運転された武政君には、大変ご苦労さんでした、厚く御礼申し上げます。

雪彦山－峰山高原－砥峰高原縦走

（踏　査）

国　沢　昭　美

昭和５８年6月４、５日

パーティー：幸内　義孝、一江、国沢

６月４日（晴）

雪彦山登山口（１０：００）－大天井岳（１１：４５）－坂の辻峠（１６：４０）－中坪峠（１８：３０）－峰山高原（１９：５０）

姫路発８：２０のバスに乗る。これをのがすと１５：００まで便がない。少しばかりの乗客を乗せバスは夢前川に添ってさかのぼって行く。上流になるほど水がきれいになっていく。ユースホステルでキャンプ場等の施設状態をきき、姫路山岳会が作成したルート図を頂く。いつものことながら遠くへ来ると時間が止ったようにのどかである。藪こぎなんかしないで、このまま木陰でのんびりしたい気分。

キャンプ場横手の登山口からもう急な登りである。出雲岩を過ぎた辺りから少し岩場があらわれてくる。大天井岳は、８８４ｍとガイドブックにも山頂にも記されているけれど、２万５千分の１の地図では、８３８ｍのピークがそれと思われる。ここからいよいよ長い縦走コースの始まりである。少し行くと右手下方に地蔵岳の頭が見え、頂上に沢山人がいる。手を振り合って相桜をする。しばらく行くと指導標があり左へ行く。９１５．２ｍピーク（地図上の雪彦山）より３つ目の９４２ｍピークで南へ行く。峰山高原への指導標が、賀野神社へ通じている南東へのルートをさしている。そちらの道が広くてはっきりしているので、私達も何気なく行ってしまったが幸内さんが気づいて下さった。指導標が間違っている場合もあるのですね。

笹をかきわけながらしばらく行くと、尾根の右斜面につけられた起伏のない道が続く。岩壁の下を巻いた辺りから上り道となりコルに達する。ここで尾根道からはずれ、半対側の谷へ下る。どんどん下っていくと林道に出た。坂の辻峠（ガイドブックでは粟生峠）までたんたんと行く。峠からは、ひどい藪道で意外と時間がかかってしまった。踏み跡と思われる笹の切れ目を捜して歩く。傷だらけである。やっとの思いで中坪峠に着いた。

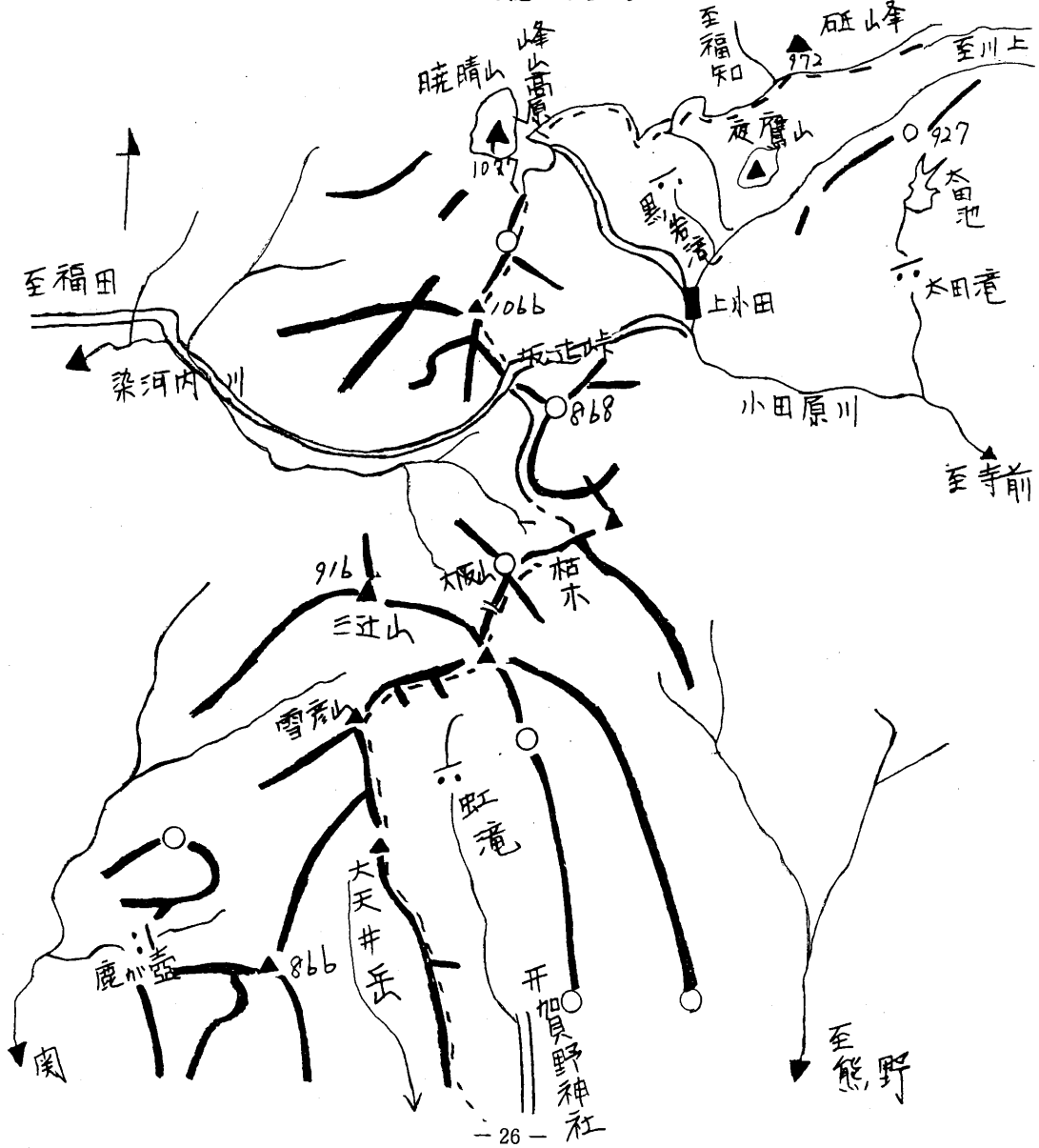
歩くことにもあきてきたしテントを張りたい気持ちだった。まだ明るいので、もう少し歩いてみることになる。峠から３０分程登って行くとピークに着いた。前方に暁晴山が見え峰山高原に着いていることは間違いないようである。暗くなって来たのでテントを張ることになる。適当な場所を捜していると、どこからか賑やかな人の声が聞えてくる。風のせいかも知れない

が近くにキャンプ場があるようである。また、リュックをかついで歩き始める。方向を見定めて歩いて行くと灯りが見えて来た。やった！

6月5日（晴）

キャンプ場（4：35）ー暁晴山（5：00）ー砥峰高原（7：20）ー川上（8：00）

暁晴山から眺める峰山高原は、キャンプ場と近代的なホテルが一軒だけ。あとは緑一色の美しい所である。峰山高原から砥峰高原へは道もはっきりついていて迷うことはなかった。ゆるやかな起伏が美しい砥峰高原をあとにして、川上の部落へ下った。バスの時間がなかったら、ゆっくりわらび採りがしたかったのに残念であった。



北　鎌　尾　根　（風疹）

米　沢　典　之

コースタイム

7月29日　七倉沢（6：40）　湯俣（10：40）　北鎌沢出合（17：00）

7月30日　北鎌沢出合（6：15）　右左俣出合（6：45）　天狗ノ腰掛（10：00）

独標（12：00）　北鎌平（14：30）　大槍（16：00）

7月31日　槍ケ岳山荘（6：00）　新穂高温泉（13：20）

7月29日　晴　七倉沢→北鎌沢出合

御在所岳藤内壁で御縁が始まりました。M県K会、秋にネパールに入るため、下社に協賛を紹介したためか、北鎌尾根をサポートして載きました。湯俣でソーメン流し、夕食はバーベキュー、間には果物と上には上があるものと感心しました。生肉を此処迄保存した苦労話しに少々咽が詰まりました。干天出合迄に増水で高巻をして、カメラを落しガッカリしていたのですが、この御馳走でルンルン気分になったのは、凡夫のあさはかさ？

7月30日　晴→風雨　北鎌沢出合→大槍→槍ケ岳山荘

北鎌沢出合は、殆んどコル近くまで水がありました。早朝大槍にかかった雲は、既に独標迄下り天狗の腰掛けより雨となり、独標は千丈側を巻きました。K会の方は水重荷もあり、それぞれ20kgを越す荷を、負いながら独標を千丈あるいは天丈寄りに、ノーザイルで直登している、その身のこなしの軽さ確かに驚きと羨しさを感じました。北鎌平附近から雨がいっそう激しく、大槍のクラックは滝のようでした。K会の一人が悪寒を訴へ山荘に入り、診察すること間違いなく風疹。山で病人を見たことは再三ですが、大学生の風疹は初めて、高年令程重い通り一晩じゅう苦しむ。

7月31日　雨のち晴　槍ケ岳山荘→槍平→新穂高温泉

昨夜の風疹氏、何とか歩けるので槍平へ下る。それでも結構足が早く、私が新穂高に着いた時は熱があるのに入浴を済ませて、ケロリとして居ました。そう言えばまだ何となく幼い顔でした。

前穂高岳屏風岩東稜（別題　章代ちゃんとおじちゃんたち）

作　中年のおじさん（迫田哲郎）

１９８３年7月２９日～３１日

メンバー　Ｌ．小林（若いおじさん）　大西（章代ちゃん）　迫田（中年のおじさん）

7月２９日　大阪発

３０日　松本 ── 上高地 ── 横尾 ── Ｔ４ ── Ｔ２ ── Ｔ４取り付き（ビバーグ）

幸内おじさんたちと大阪駅コンコースで、「さようなら」をし、ちくまに乗る。二人のおじさんは、章代ちゃんの友人（お酒の強そうなチャーミングな人）に見送られながら一路松本へ。いつも朝の遅い章代ちゃん今回は早いぞ、いつも二日酔いの二人のおじさんも今回は全々酔っていなかったのです。例によって上高地まではタクシーで入る。途中タクシーの運転手のおじさんの、「今日は、いい天気になる」との、いいお話を聞く。朝食は明神ですることに決めたので、先づは明神まで。相変らず小林さんは速い。明神でみそ汁を注文したら、素晴らしい信州味噌だけの汁が出て来た。約３０分の休憩の后出発。１ルンゼ押し出しまで休憩なし。中年のおじさんは途中苦しかったのです。横尾を過ぎたころより空模様が怪しくなって来たのです。その上、岩小舎から１ルンゼ押し出しまでの間が増水でなかなか渡渉出来そうもない。１０秒も足を入れておくとジンジンと痛む冷い水である。章代ちゃんもかわいいアンヨを真赤々にしながら、亜戦苦闘の末やっと渡ったのでした。押し出しで、暫し休憩の后Ｔ４の取付きに出発。Ｔ４へは小林おじさんがトップで、いつものようにスーイ、スイ、続いてチョット重めの章代ちゃんが、スーイ、ラストは中年太りのおじさんがヨッコラショ。途中、中年のおじさんは落石がメガネに当り肝を冷しておりました。いよいよＴ２より東稜の１ピッチ目に、中年のおじさんが取り付いたのですが、３０cmのハングが５０cmくらいに見えるのです。ハングの下で苦闘していると雨が降って来たのでダウン。暫らく雨が上るのを待って、今度は若いおじさんにトップを登ってもらいました。やっぱりうまいなあ、すぐ１ピッチ終了です。続いて章代ちゃんが登ります、中年のおじさんのようにハング下で苦闘していると、又々降雨。しゃあないのでＴ２まで二人共下降。Ｔ２にも雨がひどいので居られなくなりＴ４の取り付きまで下降。取り付き付近の洞穴で章代ちゃんたちは窮屈な一夜をザイルに身をくくって過したのです。

7月３１日

昨夜の雨で岩のコンディションが悪いので下山に決定。又々あの渡渉をせなあかんかと思うとユウウツとなる。章代ちゃんは、二人のロマンチストのおじさんたちと無事渡渉し上高地へとチンタラ、チンタラと下山したのです。こうして章代ちゃんの第１回の本チャンは南のタタ

リで終ったのじゃ。あのタクシーのおじさんウソばっか天気いっこもエエことないやんか。

白馬岳－白馬大池－蓮華温泉

－ 花 の 山 旅 －

国 沢 昭 美

昭和５８年7月３０日～８月１日

パーティー：幸内夫妻、野上芳宏、吉田（父）、大西公史、本城智美、国沢

年令が１０代から６０代までの混成パーティーであった。コースは、始め白馬岳大雪渓から朝日岳へ抜ける予定であったのが雨の為、白馬大池から蓮華温泉へ下ることになってしまいました。北アルプスで、最もポピュラーなルートである。

夏山シーズン中は、頂上まで人で数珠つなぎの大雪渓を登る。途中、バテてはいけないバリバリ？？の私が、雪渓の半ばで体調をくずして皆さんに迷惑をかけてしまいました。
何とか頂上に辿り着きテントを張り始めた頃、雨がぽっり、ぽっり。その時、〝山乞食〟と書かれた黄色のテントから男の人が現れて大声で何やら歌い始めた。その直後のことであった！雨が一段と激しさを増したのは。ゲームのバツだったのか、それとも雨乞いの歌？だったのかいやはや、その夜は大暴風雨となり恐しい一夜であった。

天気は２日目も回復せず、一大展望が楽しめる筈の白馬岳山頂もガスの中。三国境で、朝日岳から白馬大池へルートを変更する。小蓮華岳を越えた辺りで少しお天気が良くなり、前方に大池が見えたが、雪倉、朝日岳の稜線はすっぽりガスにおおわれている。ルートを変えて良かったようである。道端に咲く愛らしい高山植物に歓声をあげながら、緩やかな稜線を大池へ下った。大池も大お花畑である、登山者が多いので荒らされないようにロープが張ってあるのが残念だけれども、これも仕方がないのでしょう。

大池から蓮華温泉へは、２時間の行程である。夜は、前夜とうって変って温泉に入りさっぱりとして眠りについたのに、再び夜半から雨になる。

朝は、雨の中テントの回収。１番のバスにて平岩駅へ出た。

雨にたたられっぱなしの山行だったけれど、とっても楽しく、くつろいだ山行でした。

うさぎぎく

白　馬　岳　（ちがった充実感）

幸　内　義　孝

自分に取って見れば、白馬岳は、思い出多い山である。山へ行きたいと、思ったのは、白馬岳を見てからである。そのためか、たくさんの人々の間をぬって登る夏の白馬岳も、良いものである。吉田さんがいるので、みんな充実して、又々山へ行きたいと、思って欲しいと、思いつつ電車に乗りました。あいにく天候に恵まれず、三時頃より、雷をともなった雨が、ザーと降り初め、はりたてのテントが、雨と、風との間にはさまれたような感じでした。

でも、大変楽しそうな、みんなの顔を見ました。次の日も、雨は降っていなかったが、ガスの中で、頂上へ登っても、何も見えませんでした。小さな子供が、母親に手を引っぱられて、忙がしそうに歩いている。楽しまそうと思い、つれて来たのだろうが、強風のため、大変子供としてはつらいのでは、と思いました。朝日岳はあきらめて、白馬大池へと下りました。蓮華温泉では、風呂へ入って、大変楽かったです。最年少１６才と最年多６０才という幅広い年代が、いっしょに登山して、思った感じ、はどんなだったでしょう。これからもがんばって山の良さを見つけて、どんどん行って欲しいと思いました。

段　ケ　峰　（がま蛙）

米　沢　典　之

メンバー　山本、米沢

コースタイム

８月７日　倉谷林道下車（９：００）— 稜線（１２：２０）—段ケ峰（１３：００）—車（１５：００）

８月７日　晴　栃原→倉谷→段ケ峰→千町峠→旗谷→栃原

会の山本さんから、暑い時は冷い沢をと誘われ車で、生野→栃原口→倉谷と入りました。林道は荒れてゴルフ場から廻る方が良いと聞きました、不動滝よりアンザイレンして、沢に入り沢歩きをしました。トップを替りある滝の落ち口に、手頃なホールドがあるので握ると、柔かくヌルット動くので見ると、正体はガマ蛙。ワッ！　廃林道の朽ちた橋を、越えると、沢は二分して左の水量の多い方の滝が本谷、右の広い涸沢をつめると、少々の薮漕ぎで、フトラガ峰西の稜線に出ました。

高原状の山稜を吹き抜ける風に、秋を感じたのは、山本さんも同感でした。段ケ峰→千町ケ峰

→旗谷を経て車に戻りましたが、下山道刈り込みしていないので、私は薮を漕いだつもりですのに、山本さん曰く「大変良い道だった」.!!

お月見コンパ　　8月27日

参加人員　岸本、野上①②、田中、米沢、内藤①②、宮本、星野、国沢、矢木、堀田、小林、迫田、吉田、山内、大西、広池、幸内、会員の友人及び家族5名

幸　内　義　孝

お月見にしては少し早い時期であったかもしれない。前から決めていた日であったため、あわてて、手紙を出して、人数を確認したのでちょっと、手落ちがあったかも？

一応手紙も、届いたようで、ほっとしました。当日、高座の滝第一堰堤と決めていましたが、学校は、夏休み最後の日曜とあって、小学生たちがいっぱいで、テントも張れない状態のため、急に変更となり、第二堰堤ということにした。

前夜ということもあったが、大変多く参加して、いただいてありがとうございました。

ただもう少こし年配の方々に多く参加していただけるものと期待していました。でも、今日一日は、大声で歌を唄い又、昔の話を語り、又未来の山行を語りながら一夜をすごしました。又来年もとか、年二回ぐらい行なって欲しいという声も出て、大変うれしいです。これからも今回より、もうちょっとくふうして皆んなが、楽しめる方向に、やって行きたいと思います。

例　会　報　告

１９８３年5月～１９８３年8月　　括弧内は当番

5月１５日	総会	１３：００研修所	
２２日	日名倉山、船越山		（大西）
２９日	不動岩　ＲＣＴ		（山本）
6月　５日	雪彦山　ＲＣＴ		（広池）
７日	集会	研修所	
１２日	小豆島　ＲＣＴ		（吉田）
１９日	岡本バットレス　ＲＣＴ		（掘田）
２６日	妙号岩　ＲＣＴ		（小林）
7月　３日	不動岩　ＲＣＴ		（掘田）
５日	集会	研修所	
１０日	芦屋ロックガーデン　ＲＣＴ		（小林）
１７日	保塁岩　ＲＣＴ		（広池）
２４日	菊水山～摩耶山　歩荷		（幸内）
３１日	妙号岩　ＲＣＴ		（吉田）
8月　２日	集会	研修所	
７日	夏山合宿準備会	研修所	
１２日～１５日	夏山合宿（剣岳）		（小林）
２１日	夏山合宿　反省会		（小林）
２７日～２８日	お月見コンパ～芦屋ロックガーデン		（幸内）
9月　４日	不動岩　ＲＣＴ		（広池）
６日	集会	研修所	
１１日	保塁岩　ＲＣＴ		
１８日	芦屋ロックガーデン　ＲＣＴ		（迫田）
２５日	菊水山～摩耶山　歩荷		（幸内）

住所変更

久保雅生　〒６７３　垂水区糀台４丁目１４番地の１の１　ＴＥＬ９９－０７０７

三木義隆　〒６５７　灘区鶴甲２丁目１３５－３０２　ＴＥＬ８２１－１２２４

土居健次　〒２３３　横浜市港南区野庭町６０８－６１０６　ＴＥＬ０４５－８４５－５１２３

星野辰也　〒651-12 北区広陵町５－３２　ＴＥＬ５８３－１６６２

訂正

星加弘之　長田区東尻池町２－５－９

宮本朋之　西区北山台２－８－５

矢木研三　高槻市柱本新町８番－Ａ－６－３０７

小嶋勝俊　横浜市磯子区岡村７－４－１２

おめでた

迫田哲郎　二男　武治

編　集　後　記

神戸山岳会に入会して早や７年の年月が流れました。その間一度も会報の担当をやったことがありませんでした。何しろ編集なんて生まれて初めてで大変勉強になりました。
Ｙ氏やＫ氏に教えてもらって何とかなりましたが、うまく出来ませんがよろしく読んで下さい。
それと、今までやってこられた、担当者さん御苦労さんでした。

神戸山岳会・会報　No.１６

１９８３年１０月発行

編集者　　幸内、神田

発行者　　神　戸　山　岳　会

神戸市灘区高徳町５－３－１　内藤　正司宅

印刷所　　甲　南　出　版　社

神戸市中央区北長狭通４丁目　私学会館内